

第3部 座談会記録

【出席者】

アサダ ワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）

荒井 洋文（犀の角／一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事）

小川 智紀（認定NPO 法人S Tスポット横浜 理事長）

田中 真実（認定NPO 法人S Tスポット横浜 事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長）

長野 隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）

野村 政之（長野県文化政策課 文化振興コーディネーター）

宮城 潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）

若林 朋子（プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 特任教授）

【進行】

吉本 光宏／森 隆一郎（ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

2021年11月29日（月）14：00～17：00 地域創造会議室

*1: 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究「アウトリーチ活動のすすめ」、財団法人地域創造（2001年3月）
芸術普及活動を実施している公共ホール・劇場、美術館に対するアンケート調査、事例調査を実施し、「芸術普及（アウトリーチ）活動はこれからの地域文化施設の鍵をにぎる事業である」ことを提言した。



1. コーディネーターとしての出自と現在の仕事

— まず、自己紹介も兼ねてこれまでの経歴や現在のお仕事の内容について紹介いただきたい。

【アサダ】 表現の仕事として最初にコーディネーター的な活動を行ったのは、20代の頃にバンドマンとして音楽活動をやっている時だった。大阪で芸術系のNPOに関わる機会を得て、まちづくりや障がい福祉などの他分野と連携をしながら、アートプロジェクトを企画・運営する立場で関わった。その延長線上で、地域の方々やアーティスト、クリエイターをコーディネートして、つないでいくことになった。

今は品川区立障害児者総合支援施設で、主に知的障がいのある成人メンバーと表現のワークショップをしている。そこではダンサー、ものづくりに関わる地元の方、カメラマンなどと連携しながら障がいのある方々の場づくりを含め、文化的なアプローチから支援している。

【荒井】 長野県上田市の海野町商店街で「犀の角」という劇場、ゲストハウス、カフェ、レンタルスペースがある民間の文化施設を運営し、文化事業の企画や、コーディネート的な仕事をしている。

高校・大学時代に京都で演劇と出会い、台本を書いたり、演出したりしていたが、挫折して、いったん就職をして普通の会社勤めをした。やはり演劇の仕事がしたくて、上田市で文化政策を1年間ぐらい手伝った。そのとき地域創造のステージラボ岐阜セッションに参加して公共劇場の存在を知り、その数年後から静岡県舞台芸術センター（SPAC）の制作部で10年ほど仕事をした。

その後、SPAC を辞めて、地元で改めて自分の活動をしたと思って帰ったところで今の建物と出会い、「犀の角」を始めることになった。

【小川】 演劇出身である。今日のテーマに近い意味での出自は、開館直後の世田谷パブリックシアターで電

話番をしていた頃にさかのぼる。平成12年度の地域創造の調査研究『アウトリーチ活動のすすめ』（*1）のための取材を受け、アウトリーチって何だろうと現場でぼんやりしていたのを思い出す。

それから演劇百貨店というNPOを経験し、今はSTスポット横浜で劇場運営のほか、学校教育や障がい福祉とアートの連携、地域文化支援の仕事が続いている。自分のアイデンティティは、非営利のアートNPOだということ意識して仕事をしている。

【田中】 小川と一緒にSTスポット横浜というNPOにいる。私自身はもともと、大学、大学院で地理学やまちづくりを専攻していた。芸術分野は全く分からないまま大学のボランティアで演劇百貨店に関わった後、STスポット横浜で働いている。就職という意識はあまりないまま仕事が続いている感じで、もう13年位になる。

普通の人たちが、地域の中で、もう少し身近に、幸せに生きられる方法は何かないかとずっと気にしながら仕事が続いている。今は主に福祉や教育の分野で企画運営をしていて、芸術家と一緒に福祉施設や学校に出掛けてワークショップを行っている。

【長野】 福島県いわき市のいわき芸術文化交流館アリオスの支配人をしている。東北地方の中では結構大きな規模の芸術文化施設で、オープンして丸14年になろうとしている。オープン1年前の2007年に、広報のスタッフとして入った。その前は大学時代からクラシック音楽の情報誌で、編集、営業、編集記者、雑用など全般をやっていた。

いわきに来てからは、新しい劇場をオープンするために、市民の皆さんに芸術文化をどう伝えていくのか、今までにない価値観をどう知ってもらうかに注力してやってきた。今は支配人だが、雑用みたいなこともやっていて、今朝も、明日の調律師の手配を忘れていたため、自分で電話している。

- ◎ 官が担う領域ではなく、広い意味での市民活動
- ◎ サービスの出し手と受け手という関係ではなく、一緒にできることがある
- ◎ ある課題に対して意識がある人たちとアートで何か一緒にやっ
ていく

【野村】 長野県文化政策課の文化振興コーディネーターと、フリーランスで企画制作やドラマトゥルクの仕事をしている。大学のときにサークル活動で演劇創作のいろいろな役割を経験し、その後、公共ホール職員として勤めながら「公金を文化芸術の創造に上手につなげるには？」が自分自身のテーマとなった。その後、こまばアゴラ劇場・劇団青年団制作部では、並行してドラマトゥルクなどの役割で同世代・若手演出家の作品づくりのサポートをした。

自分の活動では、アーティストとの作品づくりを重視しているが、それが段々と、サポートする相手が、演劇から他ジャンルのアーティストや、地域の文化芸術団体などに広がり、現在のコーディネートのような仕事になってきた。その過程で東京や沖縄のアーツカウンシルに関わって、具体的な支援が仕事の一つになり、メインになりつつある。

現在は、長野県の事業の企画とコーディネートを通じて、障がいのある方も含め、県内の文化芸術の担い手の支援をしている。今後、長野県でアーツカウンシルを立ち上げ、主に県内の文化芸術団体のサポートをしていくことになる。

【宮城】 沖縄の若狭公民館の館長として、地域でいろいろなものをつなげるコーディネーターとして活動している。

もともとは沖縄県立芸術大学で彫刻を学び、2001年に那覇市前島という地域を拠点とする「前島アートセンター」というアート NPO の立ち上げに携わった。その地域は1990年頃県内で暴力団抗争が激化した際に高校生が犠牲になった歓楽街で、飲み屋ビルの空きスペースを活用して活動していた。その NPO では完全にボランティアだったので、2006年にアルバイトとして公民館に勤め始めて、翌年に館長になった。アート NPO での活動は10年で終了したが、公民館は16年目でこちらの方が長い。

【若林】 もともとは企業の文化活動あるいは文化支援活動を応援する団体に、90年代の最後から15年ほど勤めていた。経理以外はすべてローテーションで担当し、企業の社会貢献・CSR 担当者や、アート領域の NPO やアーティスト、市民、学生、研究者の方々をつなぎながら芸術文化支援の環境整備をしていた。8年ほど前にその組織を離れ、今はフリーランスで、相談を受け一緒に考えて形にしていく仕事をしている。

2. 社会や地域に対する問題意識——アートを通して何と向き合うか

— アートを通して地域のどのような課題に向き合っているか伺いたい。

【小川】 官の領域とは違う部分、広い意味での市民活動をやっているのだと思う。 指定管理者制度下の公共劇場や行政委託のアーツカウンシルの一部には、単純なサービス機能をにう局面が増えた。アート・サービス・オーガニゼーションという言葉が紹介されたころ想定していた「サービス」から変質してきた部分もあるだろう。

サービスの出し手と受け手という関係ではなく、何か一緒にできることがあるのではというのが自分の考え方で、昔で言う市民運動に近い。 ただ市民運動といっても、一致団結して権利獲得を目指す強固な運動体

ではなく、そこにある課題に対して意識がある人たちとアートで何か一緒にやっっていく方法はないだろうかというものだ。いろいろなジャンルの中に散らばる人々の思いを、アートを通してうまく結び付けたり、集まる場所をつくったり。それを応援する仕方も結構難しく、日々どうするか悩んでいるところだ。

【田中】 私たちは福祉施設の中でも、いわゆる手帳を持たない人たちも関われる「地域活動支援センター」に伺うことが多い。障がいがあるかないか曖昧な人たちが集まれる場所に困っているように感じる。でも、そうした人が集まると、意外に面白いことを起こる。どの立場、どの関わり、どのような状況において

- ◎ 自分で決め、自分で学び、自分で考えるようなことを後押しする環境づくり
- ◎ 文化権を守る先頭に立つのは公立文化施設だ
- ◎ 生活の実践としてどのようにアートをやっていくか
- ◎ アートは支援のひとつとしていろいろな個性を尊重できる



田中真実さん
(STスポット横浜)

も、自分で決め、自分で学び、自分で考えることを後押しするような環境づくりをしたいと思っている。

具体的には、手帳を持たない人たちを直接支援するのではなく、地域の事業に対する助成金で、その人たちの周りにいる人たちの環境を整えてつないでいくという形だ。自分たちで考えたり、決めたりできる場所というのは、公民館に近いと思っている。

教育事業で学校へ出掛けると、学校は地域とあまり関わりを持っていなかったり、先生も地域のことを意外に知らなかったりすることを実感する。学校へ行けば地域が分かると思っていたが、実際は違った。例えば「カプカプ」という喫茶店などをしながら、アーティストのワークショップを定期的に行っている横浜の福祉施設がある。徒歩1分のところに小学校があるのだが、「カプカプ」のことを知らず、先生も関わりを持っていない。さまざまな事業を通して、地域の実情が分かると、双方をつないだり、「遊びに行きましょう」と誘い出したりできる。

— 小川さんには、福祉を文化の権利と読み直すことで、見えてくるものがあると伺った。

【小川】 ユネスコや日本の憲法に書かれた文化に関する権利を文化権というなら、まず文化権を守る先頭に立つのは公立文化施設だと思う。教育の現場でも、障がい福祉の現場でも、公立文化施設の想定受益層から漏れている人たちがいっぱいいる。地域の助成金の事務局では、そこを埋める地域文化の担い手を育てることができるのでやりがいがある。文化権の保障という意味で言えば、行政と同じ縦割りにならないやり方でやっていく必要があって、それが文化による横つなぎだからコーディネーターという言い方になるのだろう。

— アサダさんには表現者として向き合おうとしている社会の課題について伺いたい。

【アサダ】 田中さんと小川さんの話に共感できる所が沢山あった。領域がいろいろ分断されていることは感じるが、都市部から地方へ行くと、どちらかというと

自助共助の中で、教育の中に福祉や文化が入り、地域のつながりづくりがまちづくりにつながることはある。抽象的になるが、「生活の実践として、どうやってアートをやっていくか」をずっと考えているのだろうと、自分の活動を捉え直している。

ただ、その感覚は人によっていろいろだ。無意識にできている人もいれば、そもそも文化権という発想すらない状態で日々を過ごす人、過ごさざるをえない人もいる。アートから何かつながりをつくる以前に、福祉自体がなかなか機能しないことを、都市部の現場でものすごく感じてきた。

例えば障がい福祉では、区立など公立の施設はとても縛りが強い。指定管理者が僕のような立場の人を付け、独自のやり方で地域の人とつながる。写真展、ものづくり、演芸、ダンス、音楽、何でもいい。それらアートの種をまき、施設を利用するメンバーや地域の方々、その家族と徐々に共有されていく。

では、何のためにアートでやってきたのかというと、福祉施設の目指す支援とは異なり、アートは支援の一つとして誰かをいたずらに評価せず、いろいろな個性を尊重できるからだ。そういう視点が持ち込めるところは、何となく共有されてきた。

しかし指定管理者が替わるとそれを引き継いでいくのは難しい。利用者から「今までの支援はともいい」という声が上がって、引継ぎ先の法人が引き継ごうと頑張ってくれたとしても、本質的な部分を共有して引き継ぐのは本当に難しい。なぜわざわざアートでやっているのかという、その根っこの部分の理由を体感することが重要だが、「講師を引き継いでください、名刺交換をさせてください」と言われて終わるという事態になっていて、日々悩んでいる。その分断がすごく大きいと感じている。

自分で「謎の世直し」と言いながら、一方で「謎と言わないほうがいい」とも思っている。それは、アートのなことが表面的に面白いと評価されたとして、謎だから面白くてやっているという理解では、教育、まちづ

- ◎ 福祉とアートをコーディネートできれば溶けていく
- ◎ 正解がないこと、相手との向き合い方が個別であることは、アートの性質そのもの
- ◎ 演劇をとおして自分の外側にあるものと出会う
- ◎ 劇場運営で苦心していることと、行き場所をなくしている人たちが抱えている問題は似ている
- ◎ 劇場が劇場以外の何かになれば、それを共有地と呼ぶ



アサダワタルさん
(文化活動家/アーティスト)

くり、福祉の「本質」から遠のいてしまうためだ。本質に触れるからこそアートが導入されるべきで、その辺りのいたちごっこが悩ましく、いつも考えている。

—「福祉とアートをコーディネートできれば溶けていくはず」とおっしゃっていた。

【アサダ】福祉とアートは親和性がすごく高いと思っている。関西、関東とこの10年ぐらい福祉の分野に関わっていく中で、今の品川は初めて福祉の現場にがつり入り込んだ。自分がアーティストとしてワークショップを行うレベルとは違う目線で見えてきた所がある。

そこで感じたのは、ある意味、福祉の世界はノウハウがないということ。福祉の関係者からは「そんなことはない」と言われる可能性もあるが、自分の感覚ではそう見える。特に、障がい福祉はスタッフの経験値次第の部分がある。それは、利用者一人一人の障がいの特性があまりにも違うためだ。よって、障がい者と向き合うときのスタッフ側の佇まいは、福祉大学や専門学校で学んだことより、社会経験や今まで何を考えてきたかに左右される。その自由さは、スキルが構築できていないというより、むしろ可能性だと思う。正解がないこと、相手との向き合い方が個別であることは、アートの性質そのものだと考えられるようになっていった。

つまり、人の命に関わる危険なこと以外は、「これはいい」「これは駄目だ」という価値観に縛られずに、人としてお互いを尊重しながら、支援する側とされる側が関わっていくことが、現場では重要だと分かった時に、それは、アートをやってきた人たちが日常的に体感してきたことと同じだと思った。アートをやってきた人間が、人として福祉の支援に関わっていく際、「そういう経験は何もない」と言いながら、立ち居振る舞いや佇まいが、福祉に向いている人は一定数いる。

—「犀の角」のホームページには「自分の外側にあるものと出会う場所」「変な人でも住みやすい街に」とい

うキーワードが出ている。

【荒井】私が上田の町で劇場をやるときに、何となく感覚として持っていたのは、演劇を好きな人がコミュニティをつくることは割と短時間でできるが、逆に劇場に来る人が限られてしまうということだ。どうすれば劇場の外側にいる人とコミュニケーションを取るかを考えていたときに、障がい者福祉施設の人や、若者から電話相談を受ける NPO の人と関わるようになった。福祉の人も、相談支援をしている人も、劇場のわれわれも、それぞれ自分たちが生きていくために、仕事としてやらなければいけないルールがある。

そのルールを守ろうとすると自分のやれる範囲では救えない人たちが大勢いる。どうしたらいいかと、「犀の角」に集まってよく話をするようになった。コロナで経済状況がより悪くなって、こぼれ落ちたところを丸ごとカバーしていく取り組みとして、集まったメンバーで「のきした」という市民グループをつくり「おふるまい」という活動を始めた。

先ほどのアサダさんの「福祉とアートが溶けていく」という話がすごく印象に残った。「のきした」の活動で、どこへ行ったらいいか分からない、家でも居場所がなく行き場所がないという子に出会った。学校でも仲間外れにされていて「どうして生きていったらいいか分からない」と言って泣く子の話を聞いていると、自分自身も演劇をつくる時や、企画をするときに、どうしたらいいか分からなくなるので、「ああ、一緒だ」と思った。何かつくることは、分からないなりに自分の答えを探していくことだと思うが、自分が劇場を運営するために苦心していることと、生活に困った人、行き場所をなくしている人たちが抱えている問題はすごく似ていると感じる。

今、「犀の角」がやっている劇場以外のカフェや「のきした」、DVで苦しむ女性の居場所づくりを行う「やどかりハウス」などは、もともと劇場をつくらうとして始まったことだ。劇場として始めたことが劇場以外の何かになっていて、それをある種の共有地と呼ぶな

- ◎ 市民が「あれをしてくれ、これをしてくれ」という相談事を持ち込むことで、機能が拡張している
- ◎ 相談事の背景には、課題意識や、何とかしたいという思いがあるので、なるべく応えていく
- ◎ 地域の課題は、その地域の何とかしたいと思っている人が決めて対処すること



長野隆人さん
(いわきアリオス)

らば、もともとそういったところにアートが生まれてきたのだらうという思いがある。

—長野さんからは、来る者は拒まず受け入れると聞いた。

【長野】アリオスは4つの劇場とリハーサル室を持つ、舞台芸術の施設だ。ほかに市内全域を回る「おでかけアリオス」というアウトリーチが活動の軸になっている。アリオスの設置目的には当然、地域への貢献、街のにぎわいの醸成などがある。市民の中にはアリオスには来る人拒まずのイメージがあって、個人、組織といういろいろだが「アリオスでこれをやってよ」という話がよく来る。それが当館が地域で生かされている要素というか、市民とのコミュニケーションを円滑にする要素になっている。震災の後、あそび工房という子ども向けのイベントが始まった。月1で市民のボランティアが、自分で使える工作や、読み聞かせのプログラムなどを持ち込んでくる。地元のカーオーディオメーカーを退職したおじさんたちが、おもちゃを修理しに来る。毎月、自由に集まってくれて、子どもたちが降って湧いたように遊びにやって来て、僕も一緒に遊んでいる。

託児のためのキッズルームという部屋が、今はコロナでおもちゃを撤去して開店休業状態だが、市内の子育て支援のNPO団体などが、「そんな状況だったら私たちに使わせてください」と週に何日かその部屋を借りて、プログラムを実施してくれている。コロナ疲れで家の中に引きこもっているお母さんが、その団体に誘われて出てきて、悩み事を話したり、他の市民と話すことで、何か癒やされて「また来ようね」と帰っていく。アート、アートした施設ではないが、その周辺でさまざまな活動が行われている。

ほかにも、アリオスでないと勉強できないという高校生などが沢山いる。ここで勉強するのはやめてくださいと言うのではなく、朝8時半から夜9時までなら大丈夫と、温かいまなざしで見守っている。

これは一例でしかないが、市民の皆さんが「あれをしてくれ、これをしてくれ」という相談事を持ち込む

ことで、少しずつ機能が拡張しているところもあるので、「文化施設は芸術文化の殿堂である」という自己定義を取ってしないようにしている。相談事の背景には、それぞれ持ち寄る人自身の課題意識や、何とかしたいという思いがあるので、そこになるべく応えていくことが私たちの姿勢。マーケティンググループ、広報グループとして市民の皆さんと関わりを続けて14年経つが、劇場側から「こういうふうアプローチします」というのは逆のベクトルで、日常付き合いの延長線上で今日に至っている。

—野村さんからは、県内各地のあの人を後押しするといろいろなことが起こりそうだと伺った。

【野村】長野さんが「アイデアを持ってきてくれる人の、何とかしたいという思いに応える」と話していたが、まさにそのとおりで、僕としては、アーツカウンシルを通して、民間、地域、公共ホールなど地域の担い手をサポートするイメージで活動しているつもりだ。地域の課題は、その地域の何とかしたいと思っている人が決めて対処することで、私は話し相手になって応援することだと思う。だから、こちらでテーマを決めるというよりは、その人たちが持っているものがテーマになると思う。

そういう人たちの活動の中に、他の地域でも使えるアイデアや、活動の糸口になるものがあるので、それを、別の地域に紹介したりして、繋いでいく。

ただ、地域で実践する人たちが意識していない可能性や課題が、話をしているうちに見えてくることもある。そういう場合は、「そう考えているのであれば、こうしたらいいのでは」と提案している。その提案もひとつではなく、たくさんする。その中から採用されることもあれば、触発されて実践する人自身が思い付いたやり口で前に進んでいくこともある。結果的に、相手が思い付かなかったことを気付かせる役割を担っているのかもしれない。

—宮城さんも、ネパール人コミュニティなど、いろい

- ◎ 自治能力とは、住民が消費者にならない力
- ◎ 社会教育とアートは親和性が高い
- ◎ 違和を感じる力、この人はどうしていたのかと気に掛ける力
- ◎ 課題を探して解決せねばと考えるのは「課題解決の呪縛」
- ◎ こうだったらいいなを考えて創っていく

るな地域の課題と向き合っている。

【宮城】 今までの皆さんの話には共感しかない。

全国公民館連合会が1967年に出した『公民館のあるべき姿と今日的指標』では、公民館の究極の狙いは住民の自治能力の向上にある、としている。自治能力とは、住民が消費者にならない力だ。つまり、サービスを提供する・受けるという関係ではなく、自分たちが主体となって地域をつくっていく。公民館は民主主義の訓練場として立ち上げられた経緯がある。自分たちで地域を治めていくということだが、地域の暮らしには生活とさまざまなことが密接に絡み合っている。例えば教育、福祉、まちづくりなどだ。いろいろな分野に分かれて対応しているのは、それぞれの課題に特化した専門性が必要だからだが、その反面、そもそも自分たちの生活から切り離すこともできない。

公民館は社会教育機関だが、社会教育とは特定の専門性を発揮するというよりも、もっと根底にある基盤をつくっていくことだと思って公民館活動をしている。先ほどアサダさんの話では、アートと福祉は親和性があるとのことだったが、私は、社会教育とアートは親和性が高いと感じている。お互いを認め合ったり、許容して受け入れて、クリエイティビティを持ってつくり上げていくことがすごく近いと感じる。

沖縄は貧困率が非常に高い。若狭公民館の周辺は子どもの貧困状況でも厳しい環境にある。外国人留学生とひとり親世帯が多くて、ある学校ではひとり親世帯

が6割に達している。その当事者や支援者とつながって一緒に地域の課題に向き合うようにしている。何かを仕掛けるというよりも、まず気付くかどうかが問題で、公的機関や施設は、違和を感じる力、人それぞれの状況を気に掛ける力を持つ必要がある。本来なら当たり前で、見ないようにする力が発達しているのだろうか、気付かない人も多い。アーティストやアート系の人たちはそういうものにとっても敏感だ。敏感だから生きづらさを感じている人も多いし、生きづらさ、生きにくさを抱えている人に寄り添う力も強いのだろうと思う。私はもともとアート NPO で活動した関係もあって、周りにそういうセンスを持った人がたくさんいるので、そういった人たちと協働して取り組んでいる。

地域の中で対応しなければならない出来事に向き合うとき、必ずしもアートである必要はなくて、その時々でいろいろな人や機関、状況をつなぎ合わせて活動している。アーティストの関わりが有効だと思うときは関わってもらうが、アートプロジェクトとして取り組むこともあれば、そうでないときもある。アーティストやアート系の人たちが関与するときも、その関わり方や、アートという言葉の出具合にすごくグラデーションがある。アートが見えないところで関わっている場合もあれば、アートプロジェクトになる場合もある。コーディネートと呼べるのかどうか分からないが、そういう付き合い方をしている。

3. なぜアート、文化芸術なのか

【若林】 社会や地域に対する問題意識、つまりアートを通して社会や地域の何と向き合うかについては、私は長野さんと野村さんと同じで、アイデアを持って相談にくる人、何とかしたいと訴える人たちのテーマに向き合うタイプ。

この議論で想定されているのは、アートを通じて「アート以外の」何と向き合っているかという話だと思うが、私の場合そういう境界はあまりない。アートの中

で向き合っていることもある。例えば、メインストリームではないほうと向き合っていたいか、効率、効率と言われると、そうではないほうを見たいと思うなど。課題を探して何でも解決しなければと考えるしてしまうことを、私は課題解決の呪縛と呼んでいる。課題を解決するから価値があるのではなく、こうだったらいいなを考えて創っていくことにも価値がある。世の中は何かと社会課題解決型思考だが、そうでないほ

- ◎ アーティストのクリエイティビティに刺激された人たちが、「私たちはこういうことがしたい」と言い始める
- ◎ 「スタッフは何もしない」がコンセプト
- ◎ アーティストは状況を面白く転換する発想力がある。具現化する力も強い
- ◎ 皆がいろいろなことができるという気持ちになってくる
- ◎ アートこそ目の前の日常の生活体験の仕方から変えられる



宮城潤さん
(若狭公民館)

うにも向き合いたいといつも思っている。そういう思考を育ててくれたのがアート。

【田中】 宮城さんがアートを関わらせたほうが良いと判断した理由を聞いてみたい。

【宮城】 私はもともと学生のときに美術を学んで、アート NPO で10年活動したので、何かやりたいことが出てきたときに、「こういう人に協力してもらえたら面白いかもしれない」「こういう状況に対して、このようなことができる人がほしい」と相談するのもアート関係者が多かったりする。だから、たまたまアートなのかもしれない。アートではなくてもいろいろなことが起きるかもしれないが、アートが関わった象徴的な事例に「パーラー公民館」がある。

報告書でも紹介されているが、若狭公民館から歩いて1時間以上もかかる離れた地区の住人から、自分のまちにも公民館が欲しいという要望が寄せられ、公園にパラソル、黒板テーブルを置いて公民館と言いつける活動を行っているのが「パーラー公民館」だ。

そのアイデアをうまく形にできる人がいないか考え、小山田徹さんをお願いした。彼はアートワークとして共有空間や対話を生み出す仕掛けをつくっているので、公民館としてありたい姿と、小山田さんが今まで蓄積した知見がうまくマッチして、面白いことがいろいろ起きた。当初は沖縄アーツカウンシルの補助金で展開していたが、今は地域の人たちが引き継ぎ、完全に住民主体で運営している。

アーティストが関わったため、ビジュアルはすごくキャッチーだし、アーティストやアート NPO が開発したワークショップは、強烈なインプットがある。アーティストのクリエイティビティに刺激された人たちが、「私たちはこういうことがしたい」と言い始める。一方で、通常は何もしない場を大事にしている、うちのスタッフはただ話を聞く。「スタッフは何もしない」をコンセプトとして徹底していた。アリオスと一緒に。何もしないと、人々から「こんなことをしたい」「あんなことをしたい」とやりたいことがいろいろ出てくる

ので、それを後押しする。場を少し整えるだけで動いていく。

課題解決とは別に、アーティストは状況を面白く転換する発想力がある。具現化する力も強い。そういう現場に立ち会うと、それぞれが自身でもいろいろなことができるという気持ちになってくる。そういう出会いが生まれている。私たちは基本的に何もしない。「うんうん」と聞いているだけだ。

私はもやもやしたまま話をするので、アーティストとしては受け取りづらいかもしれないが、その方が力を発揮してもらえるのかもしれない。行政系の文化機関が自分たちのイメージでストーリーをつくって、それを実践する技術者としてアーティストにお願いすることが結構ある。アーティストはリクエストに応えるかもしれないが、持っている力を十分に発揮しきれていないと思う。どこかで見たワークショップと同じようにやってほしいとリクエストするよりも、こういう課題があって、この状況をどうにかしたいというところから話し合っていくと、こちらが想定していたものとは違うものが生まれたりする。でもその方がアーティストの創造力が発揮されて面白いことが起こる。私は具体的なイメージをあまり持たず、もやもやしたまま相談することが多いが、そこからアーティストがよいものを生み出してくれるので、その力を実感する。

もちろん、もやもやを形にしてくれそうなアーティストに声を掛けるには、こちらにも経験がないとできない。

【アサダ】 宮城さんと全く同じ意見だ。確かに、なぜアートなのかという部分を難しく思う方も結構多いかもしれない。

でもアートこそ、目の前にある日常の生活の体験の仕方から変えることができる。同じような日常を過ごしていても、それを感性寄りの美的な体験として、あえて言葉にすれば、再構築できる。そこに参加して、一度体験してしまうと元に戻れなくなるというか、「見て良かったね」で終わるより、自分も何かアクションを

- ◎ 自分も何かアクションを起こそうという気持ちにつながる
- ◎ アートだ、表現だというと、いろんな人を遠ざけてしまう
- ◎ アートだからできると感じながら、あえてそのことを語らない
- ◎ 生涯学習は自分の価値観を更新して、新しい自分と出会う作業
- ◎ アートと触れ合うことで、自分自身の価値観が揺さぶられて更新され、課題に気付いて主体的に取り組み始める

起こそうという気持ちにつながることが大事なのだろうと思う。

アートやアートプロジェクトという言葉をあえて使わないほうが、普段しないような考え方でもののやり方を作れる。アートという言葉を使うとき、多かれ少なかれアートというものに対する先入観が生じて、そこに引っ張られてしまう。アートにもこういうものがあると伝えるのは、それはそれで重要な役割だと思うが、日常生活や目の前の身近なことを捉え直し、そこから新しい人生観・社会観を生み出すことに目的があるなら、かえって、アートで、という言葉が邪魔になるときは結構ある。

それを自分自身が意識的に体験したのが、10年ほど前に大阪で、「住み開き」というコンセプトで家を開くムーブメントを立ち上げた時だった。自分の近いネットワークがアート関係だったから、主な参加者がアート関係で、家で上映会をするなど、いろいろな形で家を開く表現をした。

それ以降、福祉の領域から自宅を使って場所づくりをすとか、まちづくりの一環としての空き家対策や、若者のシェアハウス活動など、当初は想定していなかったアプローチで自宅を再解釈することになり、ジャンルを超えてリンクするときに、最終的にアートプロジェクトという言葉を外した。

自分の中のソウルとしてはアートだ、表現だという感覚はある。先ほど若林さんが課題解決について話していたが、家を開くことは、実はまちづくりという目的や課題解決以前に、自分の中の表現的な営みでありソウルなのだが、それを言ってしまうと、結果的にいろいろな人たちを遠ざけてしまう。福祉やまちづくりをはじめ、いろいろな分野の人たちがせっかく寄ってきてくれたのだから、みんなで「住み開き」という言葉を共有して、もっと世の中と遊べるはずだと思ったときに、アートという言葉を外すことによって、いろいろな領域にアートを埋め込んでいこうと考えた。アートだからこそできることを感じながら、あえてそのこ

とを表面的には語らずして、今までにないような新しいコミュニケーションプラットフォームをつくっていくことが大事になることも往々にしてあると思った。

—事例調査でも、アートの役割は課題解決ではなく、体質改善や漢方薬だという話が出ていたが、行政の方はアートで課題が解決すると考えたい。

【宮城】先ほど話をしたとおり社会教育施設である公民館は生涯学習の場でもある。一般的に生涯学習とは、社会状況やライフステージに対応するために必要なことを学ぶ、自分が豊かになるために学ぶ、そういうイメージだろうと思う。しかし、もう少し深読みすると、自分の価値観を更新して、新しい自分と出会う作業ではないだろうか。そこが、アートとの親和性が高いと思うところだ。これまでの日常が違ったふうに見えて、元に戻れなくなるという話があったが、自分自身の価値観が揺さぶられて更新されていくことは、アートと触れ合うことによって生まれるとことがよくある。

要するに、地域社会で顕在化している課題をアートが解決する、ということではないが、一人ひとりが更新されていくことで課題に気付けるようになって、自主的に取り組みを始め、その結果として課題にアプローチすることはあり得ると思う。目の前にある課題にお手あげだとか、蓋をしてしまわないで、一人ひとりが自分自身を更新して、新しい発想を持つことにつながっていくので、そういう経験をみんながたくさん積んでいくと、新しいアイデアが生まれるし、そこから課題解決につながる取り組みも生まれるのではないかと考えている。

【小川】地域創造は文化的コモンズという概念を提唱していて、アメーバのような図解も示している。自分は、その議論に何か足りないような気がしてずっと考えてきたが、結局、「何を」対象にしているのかよく分からない。

コモンズとは共有財だから、それが何かを示す必要があるが、その「何を」については「文化的な営み」と

- ◎ コーディネーターは活動の中に価値を見いだして、それを活動に活かす人
- ◎ アートは何か課題を解決するための手段ではない
- ◎ 福祉的なサービスと、劇場で行われている表現活動を一緒の場所でやることで勝手に反応が始まる



荒井洋文さん
(犀の角)

書かれていてアートとはされていない。文化的な営みとはどういうことなのか。これがアートだと言って指はさせないが、何となく文化的な営みがこの辺りにあるよね、という日常の中で、「ここだぞ」と指をさすような価値を見つける係がコーディネーターの仕事かもしれない。

芸術的な考え方に基づいて価値を見いだすことはあ

ると思うが、活動の中に価値を見つけ出し、それをまた活動に活かすのがコーディネーターの一つの形ではないかと思う。こういう人たちが世の中にいたのか、面白い、この人たちと今度はこれができるかもしれないという、やりっぱなしで終わらずに発展させる回路がずっと続くと、だんだん時間が経つにつれて文化になるのではないか。

4. 演劇の力、劇場の力

— 荒井さんは演劇というものに価値を置いて活動していらっしゃる。

【荒井】「犀の角」で起きていることや、「のきした」の取り組みから感じることに、今の話を聞いて感じることは、アートは何か課題を解決するための手段ではないということだ。表現された何かを後から見た時に「そうか、これが生まれたのは、こういうことが社会の課題だったからだ」と見えてくる。

「犀の角」も、後から考えて気付くことが割と多い。例えば、劇場をブラックボックスにせず、ガラス窓を付けて商店街に開き、地域の人が劇場の中を見えるようにした。これも、演劇のシーンが閉じていく傾向にあることを課題と感じていて、演劇が地域と溶けるようにしたいという思いから、結果的に窓をつけたので、順番としては逆なのかもしれない。

— やどかりハウスに居場所探しに来た女性が、別役実さんの言葉に共鳴したという話を伺った。

【荒井】 やどかりハウスは、女性が家や職場から離れて、少し休むようなサービスを提供している。その女性たちから、うちで行われたイベント、座談会、演劇の言葉を聞いて、心が動いたという感想を時々もらうことがある。それは、いわゆる福祉のシェルターでは多分起こらないことだし、福祉的なサービスと、劇場で行われている表現活動を一緒の場所でやることで勝手に反応が始まるということかと思う。これとこれは混ぜたら危険ではないか、大丈夫だろうかと思うものも

割と無理やり混ぜている。

— ST スポットという小劇場は、多くの優れたアーティストを輩出している創造の拠点である。

【田中】 地下1階の50人ぐらいでいっぱいになってしまふような小さな劇場で、37年活動を続けている。劇場のアーティストと、地域の中で活動するアーティストの性質は、違うところも、同じところもある。自分の表現をただただ突き詰めていくことももちろん必要だが、一方で、誰かと関わること、目の前の人とできることを大事にしている人もいる。劇場の中で活動する全員が全員、外へ出られるとうことはないし、逆に、地域で活動する全員が全員、劇場で何かできるわけでもない、と最初は思っていたが、最近では両方の活動を行うアーティストも多い。

ここ数年、西井夕紀子さんというモモンガ・コンプレックス等に楽曲を提供している作曲家と障がい者施設へ出向く機会があった。劇場で活動するアーティストが地域の現場でも活動している例だ。今年の9月ごろに劇場のオープンデーという形で創作の場を設けた。そのときは精神障がいの当事者バンドと一緒に共演して、ただただ創作の時間をつくった。少しずつ往還できているのが面白い。劇場だからできることがあるし、外に出て、いろいろな人との関係の中でできることもあると思っている。

— 一番は、目の前の人をきちんとリスペクトして、何ができるか考えるということ。先ほど、もやもやを共

- ◎ 選択肢をどれだけ見せられるか。それが施設の可動域を広げる
- ◎ 施設側からの取り組みを続けるだけでなく、地域からの提案や誘いに応えることが結局地域にとって一番いい
- ◎ 今までと違う付加価値を付けることで、触媒効果がもたらされる
- ◎ 能動的な関わり方を設計するのがコーディネーターの役割
- ◎ 継続していくことで地域の基礎体温が上がる

有してくれる人の話があったが、この人が障がい者だからではなく、この人と何をしたら楽しいかを考えられる人であれば、地域と一緒に活動できると思っている。

— 長野さんは、劇場で芸術を扱うことと、地域と芸術をつなぐ仕事の関係をどう考えているか。

【長野】世の中の9割以上的人是は劇場のことを有名なアーティストやタレントのお笑いライブなどを見に行く場所だと思っているが、こういうこともできる、こういうことも可能だという選択肢を、どれだけ見せられるかが重要だと思っている。それが施設の可動域を広げることになる。

いわき市の面積は東京23区の2倍、1,230平方キロメートルあるが、その中に劇場は1つしかない。劇場から60キロ、70キロ離れた所に住む市民もいる。そういう人たちに「ここへ来てくれれば何かする」と言うだけでは、絶対に会えない。広報紙がそういう方達へのアプローチの役割を果たしていた時期もあったし、開館前から「おでかけアリオス」も続けている。そういった施設側からの取り組みを続けるのもいいが、地域からの提案や誘いに、「はいはい、分かりました。それをしましょう」と応えることが、結局は地域にとって一番いいことかもしれない。先ほどの来る者拒まずという話だ。

いわきには駅前のLATOVと、小名浜のイオンと、その中間地点とに3つのショッピングセンターがある。

今まで競合関係にあったが、コロナで一緒に客を増やさないと思えなくなると考えを改めた。そこで3つが連携した取り組みにアリオスも参加するように依頼が来た。具体的には、高校生のフラダンスのイベントをやりたいので、その招聘、コーディネートと現場対応をしてほしいというものだった。フラダンスは商業施設の人たちが考えたアイデアで、勧進元は商工会議所だった。アリオスがフラダンスで人を呼べる施設だと認識しているのであれば、それはそれとしてやらせてもらおうというということになって、人がいっぱい来た。経済的な効果があったかどうかは別にして、そこに来た人たちが喜んでくれて、商業者さんから「アリオスはこういうこともやってくれる」とアリオスを見る目が変わり、各所から「アリオスは相変わらず敷居が高いですね、こういうところにもっと出てきて、やってくれないと困りますよ。ところで、次は何をしてくれますかね？」という本音が出てきた。

それで「今まで14年間、威張っていて申し訳ございません」と「おでかけアリオス」を持っていくことで、商工会議所やショッピングセンター、ひいては地元の皆さんが喜んでくれるのであればいい。

いわき市内の湯本温泉の老舗旅館に、忍者修行のワークショップを持っていったり、弦楽四重奏団の公開リハーサルを持っていったりもした。それぞれの土地でアリオスがやろうとしていることは、今までと違う付加価値を少しでも付けることで、触媒効果がもたらされること。

5. 市民のポテンシャルを引き出して、結果につなげる

【長野】こういう要素が町に加わっていくと、今までとは違う地域の魅力が見えて、町の人たちも何かできることがあると分かってくれる。すると、町の人たちは「次に何をしてくれるのか」とお客さんの立場になるが、そのときに「お客さんではなくもっと主体的に関わってみませんか」と引っ張り出す必要がある。そういう能動的な関わり方を設計するのがコーディネーターとしての役割だ。同時にこちらが楽をした

いからということでもある。楽をして人々に能動的に関わってもらい、地域から地域への貢献を引き出すとしている。

先ほど、「漢方」という話があったが、アリオスの活動は、地域課題に対しての対症療法や特効薬のように人口が急増したり、商業施設の売り上げが何%も上がったりはしないが、継続していくことによって確実に地域の基礎体温が上がる。こういったイベントがある

- ◎ 人が持っているポテンシャルを引き出し、結果につなげる
- ◎ 人が内に持つ対処し得る力に向けて仕事をする
- ◎ 行政自体が納得するには、アートに対する先入観を更新しなければならぬ
- ◎ アートは別の思考方法を提示したり、価値観を言葉や形にして見せることが上手
- ◎ アートに身を置くコーディネーターは価値を見つけるのが上手

から、みんなで準備しよう。来る人に喜んでもらうために、これをやろう、あれをやろうというものを少しずつ引き出せるものとして、芸術、アートのなごみを持っていくことの意味が、私の関わる「いわき」という地域にはあると思う。

— 野村さんは演劇でドラマツルクの仕事をしているが。

【野村】ここまでの話でアートか、アートではないか、あるいはアートの内か外かという話が出ているが、振り返ると、自分自身は、人が持っているポテンシャルを引き出し、結果につなげることをしてきたと思う。それは相手がアーティストであっても同じだったし、今、関わっている文化芸術団体や地域であっても同じだ。自分が何かをするのではなく、相手が何を、そして、相手が続けていける、相手が納得できる、そういう選択肢を提案できるかどうか、自分が果たさなければならぬ役割だと思っている。このことにアートの内と外はない。アートにおいて考えること、それが導きになる感覚は自分の中にあるが、アートというもので区切りたいというよりは、携わっている人が内に持つ対処し得る力に向けて仕事をしたと思っている。

もう一つ、アートが持たれている先入観に対して逆張りするという話が出たが、「別の仕方では説明することを、どれだけ忠実に、有効にできるか」だと思っている。これは私が今、役所の中で働いていることに関係するかもしれない。役所の職員も私の支援の対象で、例えば財政から何か言われたときに、担当職員が納得して、自分の言葉で「こうだ」と押しつけていける考え方を提供する必要があります。表面的な言い方、お題目を教えるだけでは、結局、部署を越えた伝言ゲームの中で骨抜きになっていってしまう。あるいは、どこまで飛距離のあるフレーズを自分が生み出せるか、仕事の中でいつも考えている。

支援の主体である行政自体が納得できるには、アートが持たれている先入観を更新しなければならぬと思う。アート関係者も巻き込んで、先入観を更新して、

納得できる選択肢を示したいと思っている。

【若林】すごく共感する。野村さんは「先入観を更新する」という言葉で語ってくれたが、「別の思考方法の提示」ということに尽きる。

結局、コーディネーターも、アート自体も、すべて地続きのところにいる。今日は福祉、今日は公演、今日は地域と明確に分かれているのではなく、地続きの中で動いているのだと思う。

最初にアサダさんが言ったように、福祉とアートには親和性の高い領域がある。いわき市では「igoku(いごく)」というユニークな地域包括ケアを推進していて、生と死がテーマの祭典「いごくフェス」にはアリオスも関わっている。地域包括ケア推進課の老いや死を考える取り組みと上手に結び付いて、高齢者福祉の領域と地続きになっている。若狭公民館では防災とアートが地続きに結び付いている。親和性のある領域を否定しないで、そこに価値を見つけると小川さんが話していたが、アートに身を置くコーディネーターはそういう価値を見つけるのが上手なのだろう。外から見ると、別の領域へ出掛けていって結び付いて、何か課題を解決しているように見えるかもしれないが、荒井さんも言うように、実際は地続きの活動だから、ご当人たちは結果的にそうなったと思っているのだろう。コーディネーターなのだ意識せず、日々の仕事の延長線上でやっていることも多いのではないかと感じた。

アートは別の思考方法を提示したり、価値観を言葉や形にして見せたりすることが上手。結局、野村さんが言うように、人と向き合って、その人がこうしたい、こうだったらいいと望むところへ向かう作業をサポートしているということなのかなと思う。

【アサダ】若林さんが話していた「このようなやり方もあるよ」と提示することは重要だと思う。ただ、別の答え方、別のやり方があるときに、世の中では課題解決が根っこの部分に既にインプットされていて、物事を考える上でそのことに無意識に引っ張られてしまう。例えば、まちづくりという領域で、こういうやり方で



若林朋子さん
(プロジェクト・コーディネーター)

- ◎ 根っこの部分の課題解決に無意識に引っ張られてしまう
- ◎ アートは課題解決の前の部分の話をしている。課題解決と位相が1つ違う
- ◎ 新しい自分に出会ってもらって、価値設定を変える
- ◎ 課題解決と価値創造は裏表。両方から説明すれば、アートの価値が広がって見える

コミュニティに関われば、課題解決するけれど、実はアートや表現を通じて「こういうやり方もある」と提示すると、その二つは、まずもって並ばない。なぜな

ら、アートは課題解決の前の部分の話をしているからという気がしている。

6. 課題解決と価値創造

【アサダ】このやり方に対してオルタナティブなやり方があるという言い方だけだと、課題解決の延長線上に別の方法論があるという誤解は解けないままのような気がする。ただ、その誤解がある状態の方がこの2つの比較が一般的には分かりやすいと思う。

しかし、本当はそこを伝えたいのではなくて、そもそも、課題解決から物事を捉える見方そのものと、違うやり方があるということで、そのことは課題解決と同列に並ぶのではなく、位相が1つ違う段階のことだよ、と言おうと思ったとき、途端に言語化しにくくなって、分かる人しか思考が通じなくなる。そのことにずっと悩んでいる。

【野村】今の話は多分、アサダさんの仕事が課題解決の世界にどっぷり漬かっているからだとして私からは見える。その時々で、もやもやしているものを課題化しなければならぬし、解決すべき課題だと思い込んでいることを課題ではないと再設定することも必要。それがコーディネーターの定義しづらさとも関係していると思う。投げられてきた球に別のキャッチの仕方があるという感じだろうか。

僕は文化事業をやる人たちから相談を受けると、必ず課題の設定をするように言う。自分が解決したい課題で構わない。誰かの課題でなくてもいい。作業仮説として課題を設定することで、僕との間では、何を中心にしてどこへ向かいたいのか、というストーリーと一緒に考えることができる。課題を解決しなければならぬかどうかも含めて考える。

一方で、相手が「こういう課題解決を」と、どこかで聞いたような案を持ってきた場合は、むしろ、課題が出てくる元はこういうことだから、だとすれば「こういうやり方も、こういうやり方も、こういうやり方も

ありますよ」と言って混乱させて自分で考えてもらうこともある。この両方の戦法があって、そのことを通じて新しい自分に出会ってもらおうというか、価値設定を変えると言えればいいか。

【アサダ】マインドセットをいったん混乱させるということか。

【野村】マインドセットから変えていかなければならぬ。そのときは自分で考えてもらう必要があるし、自分が見ている景色の中で、できることを積み上げていってもらおう。そうでなければ継続しない。その辺りに私としては自分の役割を見ている。

【若林】私は課題解決と価値創造は表裏一体だと思っている。一見、課題解決型でも何らか新たな価値を生み出していたり、逆に価値創造型が誰かにとっての課題解決につながっていたり。両面を見ることができると思う。

課題解決と価値創造を「ばきっ」と分けようとする、アートの説明なんて本当に難しくなってしまう。両方から説明すれば、アートの特徴や価値がぐっと広がって見えるだろう。「アートが別の領域と接続すると、何か解決されますよ」と無理に訴えなくていい。「裏返せば価値創造／課題解決でもあるんですね」と言えるようになればいい。

【野村】付け加えると、最近は課題と一緒に、行政の人も好んで使う「アウトカム」という言葉がある。私は地域の人や小さな文化芸術団体を相手にしていると、「課題解決」と同じで、「アウトカム」と言った途端に自分と切り離されたことと捉えられるので、「どうなったらいいと思うか」と緩い形で聞くことにしている。欲しいのは、その人が取り組んだ先に、ある種、現在と

- ◎ 欲しいのは、その人が取り組んだ先に、ある種、現在とは違う何かが実現された絵
- ◎ 一番大事なのはインカム。活動の広がりの中から次のインカムをつくる初期設定に注力する
- ◎ コーディネーションのキーワードは「編集」
- ◎ インカムという見方で地域資源を見る



小川智紀さん
(STスポット横浜)

は違う何かが実現された絵だ。

【小川】 インプットがあって、アウトプットがあり、その先にアウトカム、あるいはインパクトがある、というのは、だいぶ流通してきた考え方だと思う。実は、そのロジックモデルには含まれていないが、一番大事なのはインカムだと思う。

私は活動にいろいろ広がりが出てきたとき、そこから次のインカムをつくる可能性に目を向けている。たとえば、精神障がい者の活動の中に、性暴力サバイバーの取組みと共通する世界が見出せたりする。多くの人が見向きもせず、関係者も特段意識を向けない瞬間に対して「これは面白いよ」と見だし、次の展開を始めるところに意義がある。その先は成り行きで、プログラムに関してはなるようにしかならない。それで何かが出て、どんな効果があったかに興味のある人は多いが、むしろ僕は「あの人をアーティストに仕立ててプロジェクトを回したら、絶対に面白くなる」という、その初期設定の部分に注力している。だから、「評価はどうなった、数字はどうなった」などと言われても、仕事だからやるけれど、そこに第一の関心はない。

むしろ、始まりのお金以外のところで、「地域資源を活用した何々事業」と言った場合、地域資源とは具体的に何なのか、「その辺りをぶらぶらしている、あの引きこもりのお兄さんに詩をつくってもらってみたいじゃない?」という、頭の部分の議論がもっと豊かにならないと駄目だと思うし、役所にもそこを分かってほしい。インカムはお金のことだと思っている人がいるかもしれないが、僕らはお金以外の価値をつくっているというか、見だしてきて、「お金以外の資源はこれですよ」というのを事業の中から引っ張り上げていくことが、仕事だと思っている。

【野村】 「インカム」は素晴らしい視点。感動した。最初に田中さんが言っていたように、隣に「カブカブ」があるのに、そのリソースに地域の目は向いていないということ、スタートするときに押さえられるかど

うかが、その後の継続性に関係してくる。

【アサダ】 小川さんの言うインカムというのは、地域の中にこんな人がいて、あんな人がいて、あんな怪しい場所もあるということだと思う。田中さんのお話の「カブカブ」と小学校は、コーディネーションによって価値が生まれるのだと思うが、そのコーディネーションで何をやっているかのキーワードは「編集」だと思う。編集の中の一作業というか、新しい価値をつくるために価値を編み直していくことだなど考えたとき、インカムという見方で地域資源を見ることがすごくしっくりきた。

【若林】 コーディネーターの立ち位置や仕事をロジックモデル的に考えれば、例えば野村さんが誰かに相談を受けたとして、野村さんがいろいろな世界から持ってきて相談者に提供する資源がインカム。それを元に相談者が自らの資源をインプットして、何かを自分のところで生み出したものがアウトプット。そのアウトプットをより広い範囲、社会につなげて広げていくのがアウトカム。例えば、宮城さんがアート×防災を公民館の領域に広げていったことがアウトカム。アウトカム、インカム部分の循環をつなぐのがコーディネーターのかなと、今の話を聞いていて思った。

【荒井】 先ほども言ったように、課題や悩みがあって何かが始まるというより、実感としてあるのは、できてしまう、生まれてしまうものが、どういうものになって、その結果、価値が生まれてくるというような、後から何か分かることの方が多。

だから、こういったものをつくりたい、こういう人でやったら面白そうだと考えても、結果を書けないからすごく難しい。でも、そういうものが生まれることをお手伝いしている、一緒にやっているという感覚はある。抽象的になるが、この間も「のきした」の人たちと話をしていた時に、今ここで話している場、人と人の間にある場が何かになっていく、という話になった。

自分でよく使う表現で言えば、コップから溢れてく

- ◎ 溢れてくるものをどう受け止めて、どうつなげるか
- ◎ 「個人の自治」まで考えて文化をやっていく
- ◎ 別の力が蓄電される場。緩さや余白があって名付けようがない場、アートのものを軸にした拠点
- ◎ 公民館を無目的でいられる場に変えたい
- ◎ あることを目的に行くと、それ以上のことが生まれにくい
- ◎ 市民をサービスの消費者にさせない

るものを受け止めて、受け止めたものが表現になって、それを歴史的な文脈や合理性と合わせたときに、表現、文化、芸術という言われ方をするのもかもしれない。人それぞれに溢れてくるものはいっぱいあるので、溢れてくるものをどう受け止めて、どうつなげるか。それを同じお皿に入れたり、合わせたりしていることをやっているのかなという感覚がある。

【野村】先ほど宮城さんは、自分のもやもやをアーティストが形に変えてくれると話したが、そういう「逆コーディネート」とでも呼ぶべき姿勢が荒井さんと共通すると思う。荒井さんがもやもやしているから、周りが「こういうのはどう？ こういうのはどう？」と言ってくる。場を持つ人がそういうあり方をすることで、提案する側は投げやすくなると思う。何かして喜んでもらいたいし、実際に喜んでくれるという、合気道のような逆方向のコーディネートのあり方というものもあるのかなと思った。

— 以前、荒井さんは「犀の角」をみんなが勝手に使い始めたと話していた。

【野村】 そうなっていると思う。

【荒井】 むしろ最近では、「荒井さん、そうじゃない。こう使うんだ」という感じになっている。

【野村】なぜアートなのか、で思い出したことがある。「のきした」に関わっている上田映劇の直井恵さんがやっている「うえだ子どもシネマクラブ」でのエピソードだ。学校のソーシャルワーカーが家の玄関まで行っても、部屋の中にいる子どもに会えなかったが、その子が自分で「うえだ子どもシネマクラブ」に行くと決めて、映画館のロビーでソーシャルワーカーと初めて対面するということが起きている。ここに文化芸術の持つ、受ける強みがある。本人がそうすると決めて、自分の力で成し遂げる。

「個人の自治」まで考えて文化をやっていく。長野県は「学びと自治」をテーマにしている、着任するときに、私もそう考えたのを思い出した。

【アサダ】今の「個人の自治」は、母親やソーシャルワーカーが普段担っている社会的な役割を、逆に引剥がさないとできない。引剥がして余白が生まれるところ、生まれやすいところが、「犀の角」や宮城さんの公民館だと思う。自分が担っている社会的な役割を語らなくても、ある程度は済むような場所で、そこそ別の力が蓄電される場になり得るように感じる。最初に宮城さんが言っていた「緩さ」とか、ルーズであって、余白があって、名付けようがないような場、アートのものを軸にした拠点というのは、恐らくそういう力を内包している。

【小川】パーラー公民館の発想はすごいですよね。楽しいし、面白いし、しょうもないし、くだらないし、でも、やはり魅了されますよね。

【宮城】公民館は目的を持った人が集まる場になっていて、実はそこを変えたいと思っている。無目的でいられる場、そこにそのままいてもいい場が本来あるべきだと思う。そこで、たまたま出会った人や出来事から、何かしたいという気持ちが生まれて初めてことが起こる。あることを目的に行くと、それ以上のことが生まれにくい。

先ほど話に出た余白のある場をつくるため、市民をサービスの消費者にさせない公民館にしたい。そう思っているけど、つい学びの場や機会を一生懸命に提供してしまう。そうではない場をつくるチャレンジをしたという思いが、ふつふつと湧き続けている。

「パーラー公民館」の実践は、公民館のない地域の人から、公民館が欲しいと言われたときにチャンスだと思った。公民館に求められる「つどう・まなぶ・むすぶ」役割、機能さえ持てば、建物がなくても公民館と言って、そこで地域とつながったり、自主的にアイデアを出したりして、活動するきっかけをつくっていく。

自分たち自身のチャレンジとして、公民館のあり方への問題提起と、地域コミュニティのありよう、いずれにもアプローチしたいという思いがあった。そこにはアーティストに非常に重要な役割があったし、もや

- ◎ アートの内と外に関係なく、ここで起きている出来事の評価があり、信頼関係がある
- ◎ 幸福追求権としてのアートと生存権のためのアート
- ◎ 震災復興の時には幸福追求権と生存権の境目がなくなる
- ◎ 市民の人たちが助力してくれる動き

もやに対しても形をつくってくれた。小山田さんだけでなく、いろいろなオープンソースをもっているアート NPO のワークショップの手法を借りて展開もした。

【若林】 宮城さんの取り組みは公民館の世界では大変な注目をされていて、公民館の OS を新しく更新したのではないかと驚くぐらいだ。

【宮城】 アートの内と外という話があった。私たちの生活と地続きの中で、「これがアートだから」「アートとはこんなものだ」という先入観があることよりも、ここで起こっている出来事や、わくわくしている人たちの様子、町が動いている様子を実感してもらうことがとても大事だ。地域の人たちは、パーラー公民館がなくなったら困ると、今は自分たちで動き始めている。那覇市の行政も、若狭公民館の取り組みを非常に高く評価してくれている。文科省や公民館業界でも評価されるようになると、事実として良いことをしているな、という雰囲気が出てくるんですね。私は外で話をするとき、もともとはアート NPO にいたことを必ず言う。そうすると、何となく「アートってすごい」という目で見られたりする。

アートの内と外に関係なく、ここで起きている出来事の評価があり、信頼関係がある。私は行政職員それぞれに対して、できる限りのことは協力するように心がけている。コーディネーターはそういう関係性や信頼関係をつくるのが大事で、それが評価ともつながっていると思う。実現させるためには、どういう振る舞いをするかは結構重要になる。

【小川】 最初に僕は文化権の話をしたが、今の文化は文科省、文化庁の社会教育部門から育ってきたものが主流で、幸福追求権としてのアートだと思っている。しかし、時々、生存権の領分に触れることもあり、アートや表現の場がないと死んでしまう人がいる。表現を抑制されると自分が自分でなくなるのだ。生存権のためにアートをやっていると言うのは面はゆいが、僕ら

は確実にそういう人たちと出会っているので絶対に撤退できない。どうしても、ここをやらなければならなくて、それを伝えるのはすごく難しい。

アリオスの震災復興の本を読んで、震災のときは幸福追求権と生存権の境目がぐちゃぐちゃになっていると感じた。施設として生存権の部分、今を生きていくための部分と、いろいろなところへ出掛けていくおでかけアリオスで「楽しいよね」と思わせる部分を持っていて、この両輪がフルセットでアリオスに備わっているということですよ。

【長野】 それほどの施設ではないですよ(笑)。自分たちが課題解決して差し上げようというようなことは、おこがましくて言えないという所はある。むしろ、お役にたてることがあれば、求められればいくらかでもやらせてもらいますし、それで市民の方が楽になるのであればと思います。

僕らは公を背負っているし、行政の末端として、市民に対してレベルの高いものを提示する責任がありますが、質のあり方に関しても結構突っ込みが入り、たたかれたりする場合も多い。建物は立派だが欠点や課題もいっぱいある中で、市民の人たちが「ここは私が手を貸そう」「それはあなたの考え過ぎだ」と助力してくれる動きが最近は出てきている。

現在、アリオスコミュニティという市民主導の取り組みをやっているが、市民の皆さんから、「アリオスのここがもったいないくない?」「こういうこともできるのでは?」という声を掛けられる場面が増えてきた。

オープンして15年で、予算もスペックも恵まれた状態から、持続可能な施設運営をあと45年位は続けなければならないときに、施設や運営に課題があることによって、市民の皆さんが手を差し伸べてくれたり、一緒にやって行こうと言ってくれる環境はすごくありがたい。誰かの課題を解決して差しあげられるかもしれないが、一方で、自分たちの課題を埋めてくれる存在がある。互いの弱みを共有しつつ、持ちつ持たれつの関係性を大事にできるといいと思っている。

- ◎ 施設に課題があって生まれる市民との持ちつ持たれつの関係性
- ◎ 優れたコーディネーターはメディア
- ◎ 周りから見て自然で、必然に思える水路付け
- ◎ 雑談がコミュニティの日常を複層的に支え合う
- ◎ なにげない雑談が場を動かしていくエンジンにもなるし、実は支援にもつながっている
- ◎ 「相談してもいいよ」と旗を掲げることは大事

7. 雑談・相談から始まること

— 余白や決めないことという言葉が出ている。事例調査で、複数の方々から雑談の重要性や、相談に乗ってあげるといった感覚が大切だと伺った。

【小川】 雑談や相談など流れていってしまうものに対して、自分がコーディネーターとして真正面から向き合う主体だと思ったことはない。格好良く言えば自身はメディアだと思っていて、優れたコーディネーターはみんなメディアに見える。例えば若林さんは、若林さんが何かやっているふうには見えない。若林さんが何かをつうと右から左へと動かす。そう言うに変だが、中間支援の仕事をした場合、相談のふりをして雑談しながら、いろいろたまっているものをどうにか順番に流していくことは、すごく重要だと思う。

つまり、中間支援は問屋で、問屋に注文や在庫が積み上がれば止まってしまうから、次から次へと流していく。コーディネーターは無色透明のように見えるが、そこでは確かな水路づけをしていく。それが周りから見て自然で、必然に思える水路付けが必要だ。問題を解きほぐすために雑談、相談から入るのはよくあるパターンだと思う。

【アサダ】 東京都のTURNという企画で、7月ごろから世田谷にある精神障がいの方の就労や居場所となっているハーモニーという施設に僕自身はアーティストとして月に何回か通っている。みんなで写真や音楽のスライドショーのような映像の作品をつくるのだが、たまたま昨日がその発表会だった。今までハーモニーの現場は、普段だったら、20名ぐらいのメンバーが2フロアに分かれて、各自いろいろな所で、何をするでもなく座ったり、コーヒーを飲んだり、誰かとしゃべったりするが、それがコロナ禍で一変した。

本来は、朝10時から夕方4時までいて、ご飯も一緒に食べたりするところだが、人がかぶらないようにするために、3人まで1時間半ごとに交代して、みんな帰っていく。一部はオンラインで、「元気？」と生存確認の

ようなやりとりをした。

コロナ前は、こちらはこちらで、あちらはあちらでという具合にいろいろな所でしゃべっていた。スタッフとメンバーのやりとりだけでなく、メンバー同士のやりとりなど、もろもろを含めた雑談がコミュニティの日常を複層的に支え合っていた。そういう場の在り方が少しずつ変わってきている。

取りあえず、今はコロナの状況がやや落ち着いてきて、あちらでもしゃべって、こちらでもしゃべってというのは久しぶりに見る光景だと誰もが話していた。目的を持った部屋分けはできても、自動的に誰かと誰かがしゃべっているところへ、誰かが近づいて、またしゃべる。気が付いたら誰かがトイレに行っている。そういうことが場を動かしていくエンジンにもなるし、実は支援にもつながっているのだろうとまさに話していた。そういう部分が、先ほどの余白や、無目的なところから何か生まれるコミュニケーションに、本当につながりがあるのだと思う。

【宮城】 「相談してもいいよ」と旗を掲げるようなことは大事だと思っている。例えば沖縄は離婚率が全国で一番高くて、夜の街にも母子世帯が多い。参加者が集まりにくいのが原因なのか、公的機関でも母子世帯を対象にした講座はあまりやっていないようだ。しかし、そういう講座を公民館でやると、シングルマザーに目を向けている人がいる、目を向けている施設があると分かる。在住外国人に向けた取り組みを一緒にやることで、当事者はもちろん、関わる人たちもあそこへ相談に行けると分かるし、支援側もここに来ればいい。そういう活動を始めると、いろいろな人が情報や、やりたいことを持ってくる。相談に来てもらわないと雑談はできない。相談というか、まず来てもらう。あるいは出掛けていって話を聞くのも大事だと思っている。

私が前島アートセンターで活動をしていたときは、行政や企業からの資金援助は全くなく、手持ちで運営

- ◎ 地域の中に居場所がなさそうな人たちの居場所
- ◎ 来てもらうために、入りやすく、抜けやすくすること
- ◎ いろいろな人が入りやすい仕掛け、しつらえ
- ◎ 突き詰めずにほどほどにすることで話が始まる
- ◎ 場づくり自体をアートと捉えて焦点を当て、初期設定に力を注ぐ
- ◎ 場とは受け入れもするし、出て行くもするという双方向的なもの
- ◎ コンプライアンスが目的化され、聞く姿勢が弱くなっている

していたため、超貧乏だった。そこに夜になると家に誰もいなくて、居場所がないような小学生が小銭を持ってホットサンドを食べに来たり、昼間から酔っぱらったおじさんが入ってくることは日常茶飯事で、地域の中に居場所がなさそうな人たちの居場所になっていた。何となく入って来られる、そういう緩さがあった。困ることも多かったが、そういう場は大事だと思っていた。

公共施設ではそういった人たちをあまり見ない。時間も経済的にもゆとりのある人が、趣味の活動をするために出入りしているように感じて、公がやるべきことは何なのかという「もやもや」から、誰をターゲットに税金を使うのか、憤りのようなものがあった。公民館はもっと、施設の外にも目を向けて、従来の活動よ

りも拡張した取り組みもできることを発信したい。公民館そのもののあり方を問い直すこともモチベーションになっている。発信することで、同じ問題意識を持っている人が顕在化され、そのテーマに関心のある人たちが来やすくなる。こちらも旗を立ててみたものの、実際はよくわかっていないということがある。でも多様な人が来るようになり、そこで対話しているうちに状況が変わってきて、次の展開に発展することも多い。

場を持つときにはどういう場を設定するのかということ、来てもらうために、入りやすく、抜けやすくすることを意識している。相談や雑談から何かが生まれるためには、そういう環境をつくるのがとても重要だと思っている。

8. 場づくり、しかけづくり

【荒井】今の宮城さんの話にも私も共感するところがある。僕自身は相談を受けることはあまりしないが、「犀の角」を場として、いろいろな人が入りやすい仕掛け、しつらえをするように努めている。劇場と言っているが、法律的には飲食店の形態としてやっているし、劇場はゲストハウスのロビーでもあり、カフェでもあり、やどかりハウスでもあり、同じ場所にいろいろな機能があることで、同時にいろいろな人がその場にいるという状況になる。僕がそのようにコーディネートしているというよりも、勝手に人が結び付くことが起きているなどと思う。最初はゲストハウスと劇場を一緒にすることで、地域の人とアーティストやゲストハウスのお客さんが出会えるといいなと思っていたが、コロナによって旅行者が少なくなって、地域の人と、地域の中で増えてきた困窮者が勝手に結び付き始めている。

長野の上田の方言で、「ほどほどにしておきなさい」という意味の「なから」と、「中途半端なやつだ」という意味の「ちゅうっくらい」がある。「犀の角」は劇場としても中途半端で、カフェとしても中途半端だ。一応コーヒーは出せるが、難しいカクテルを注文されると、お客さんに教えてもらうこともある。お互い突き

詰せずに「ちゅうっくらい」「なから」にしておけば、話が始まるという、うちの場合はそういう雰囲気になっているかもしれない。

【小川】アサダさんが10年位前に言っていた、場づくり自体をアートと捉えないとダメだということ、考えながら活動してきた。要は場づくりに焦点を当てるということ。それが課題解決につながるか、価値創出につながるかはさて置いて、初期設定に力を注ぐ。「住み開き」も同じだ。「住み開き」をして何になるのか。それぞれが考えればいいこと。そういう焦点の当て方はやはり正しかったと僕は思う。そういう視点でコーディネーターはみんな動いていけばいい。

【野村】今までの話は全くそのとおりで、場とは何かという時に、一方的ではない関係で、受け入れもするし、出ていきもするという双方向的なもの。能動、受動、どちらもあるし、中動態があるとしたら、そういう状態もあると思う。

そうした時、今、公共ホールや行政で起きていることは、コンプライアンスの目的化だ。本当は目的を実現するためのコンプライアンスであるべきなのに、コンプライアンスが目的になって、それを実現しようと



野村政之さん
(長野県文化振興課)

- ◎ 公共ホールは自らの課題を市民に知ってもらって、市民に協力してもらおう
- ◎ 芸術文化、アートはコミュニケーションを構築する場になり得る
- ◎ 人口減、税収減にどう対峙するか、思想が必要だ
- ◎ 雑談なり広聴という観点から、深く聞くこと
- ◎ 一人ひとりのポテンシャルを引き出すコーディネーター

している。行政から外注や委託、指定管理に出しているなら、お金をを出している側の意見が強くなり過ぎてしまっていて、その結果、先ほどの話で言えば広報に対して広聴があるべきなのに、聞く姿勢がすごく弱くなっている。役所側から見ると、聞いてしまったら答える必要が生じるが、答えるリソースがないと自覚しているため、聞けなくなってしまっている。これが今、本当に世の中の問題だと思う。

今、形式的にコンプライアンスを示すための仕事が多量にも増えすぎて、役所や公立機関の人たちも、どうすればいいのかと悩んでいるだろう。そういう状況を緩和するためにも、先ほど長野さんが言ったように、公共ホールは課題だらけの部分を何かの方法で市民に知ってもらって、自分たちの共有財産だ、ということでもって市民に協力してもらおうという振る舞い方をすべき局面に入っている。にも関わらず、行政の中では、いまだに行政改革という形で自分たちの持つ力を振るって予算を切っていくことに、達成感を持っている気がする。

指定管理者と役所の間にコミュニケーション不足がある。市民に助けてもらえる可能性があるのに、指定管理者は全部を役所との間で解決しようとする癖がある。逆に役所は、あそこがダメだ、ここがダメだと、一方的に役所の基準で切ってしまう。昔はそれでもよかったかもしれないが、それは、ある種の社会の「成長」をイメージできたからではないか。人口減、税収減に文化政策・行政全体がどう対峙するか、思想が必要だ。

今は課題解決が課題になっていて、課題解決がすべてになってしまうと、それこそどういう目的で、どういう役割の人が、どういうパフォーマンスをするのかに皆が囲い込まれて、雑談もできなくなる。どうとい

うこともない意見をどちらも言い合う状態を雑談だとすれば、そういう状態がどうやって行政と公的機関、公的機関と市民の間に作れるのかを本気で考えないといけないし、一応そういう仕組みにはなっているはずなのだから、そこを認識してやれないのかと真剣に考えたいと思っている。

【長野】 「行政」対「公立文化施設」対「市民」という構図がまだあって、行政がパブリックコメントを取っても、それを生かすつもりはないという姿勢が見えれば、市民は不信感を持ってしまう。雑談なり広聴という観点からすれば、何にしても深く聴くことだと思う。生かせない意見ばかりではないはずだ。こちらとしては、こういう生かし方も、ああいう生かし方もあると提案しているのだから、それを軌道に乗せるなり、事業化するなり、選択肢の見せ方があるのに、杓子定規な対応になっていることが、いろいろな所で軋轢を生み出している。結局、行政が共創するつもりはあるのかどうかという問題だ。

ただ行政に対する批判を続けて敵対関係に陥るのではなく、譲れる場所があるかもしれない、ここは一緒にやれるかもしれない、知恵を出せるかもしれない、というコミュニケーションを構築する場に、芸術文化、アートがなり得る。そこから未来を切り開く一つ手掛かりが出てくるのではないかと思う。

【野村】 それがまさに文化的コモンズのビジョンなのですよ。行政、公的機関に役割を持たせ過ぎてもバランスが悪い訳で。その辺りの仕切りが立ち過ぎているところに、コーディネーターは何とかコモンズとしての場をつくっていかうとしている。仕切りは小さなものから大きなものまである。

9. コーディネーターが大切にしたいこと

【宮城】 考え方を転換する必要がある。先ほど野村さんが言っていたように、一人ひとりのポテンシャルを引き出すことがコーディネーターの重要な役割や資質

かもしれない。アサダさんも福祉の分野で、ノウハウが蓄積されていないと話していたが、実際に一人ひとりの経験値によっていると思う。コーディネーターの仕方もそれぞれの状況によって変わり、マッチする人、

- ◎ 人によらず、同じようにできることを基準にすると、低いところに合わせなければならない
- ◎ 凸凹がある前提でどのような仕組みを作れるかを考える
- ◎ コーディネーターの存在が大事だという共通認識。考え方のシフトチェンジが起きる場づくり
- ◎ クレーマー化する消費者目線ではなく、自分の地域がどうやったら面白くなるかという市民自治を涵養する態度

マッチしない人がいる。それをみんな一様にするのは無理だと思うし、そうしようとしてもやはり限界があると思う。

これまで公共機関や、公共施設は、人によらず、同じようにできることを基準に考えていたと思うが、そうすると、低いところに合わせなければならない。この人はできて、この人はできないことを、凸凹がないようにならしていく。でも、凸凹がある前提でどのような仕組みを作れるかを考えることにシフトしないとけない状況に来ていると思う。どこの公共施設でもみんな一律のサービスを受け、どの職員が対応しても同じようにできる、そういうことを目指し過ぎている気がする。人によって異なることを前提とした仕組みづくり、それをみんなで考えていくことが今後は求められると思う。

コーディネーターの資質については、得意、不得意を前提に、みんなでフォローできる体制ができれば、コーディネーターのタイプも広がり生まれる。そういう仕組みをつくるにはどうすればいいか、考え方をシフトすることを前提に、コーディネーターについても、文化施設の在り方についても、考えていけるといえると思う。

【若林】コーディネーターはそれぞれでいいというのはその通りだと思う。コーディネーターに必要な共通の専門性とか理想だとかいうものはない。何かその人の得意な分野があれば良くて、それを専門性と呼ぶなら専門性なのだろうが、いろいろなタイプのコーディネーターがいることこそ良い。

コーディネーターの件で、唯一共通してほしいのが、コーディネーターという存在は結構大事なのだという共通認識が生まれることだ。皆さんの話を聞いていて、1カ月やそこらでコーディネーターになれるような感じでもないのでも、もし公立文化施設の内部にコーディネーターを置くのであれば、一定の期間は腰を据えてコーディネーターとして活躍できるような体制を公立文化施設業界でつくっていけるといいと思う。

そのことで、考え方のシフトチェンジが起きる場をつくっていける感じがした。

【アサダ】1周回って、小川さんが冒頭にした市民運動の話につながったという気がする。先ほど長野さんが言ったように、行政があって、公立文化施設があって、市民があって、その間にコーディネーターのいる構図があるとすると、市民はクレーマー、悪い言い方をすると意識高い系のクレーマーになりがちだ。しかし、緩やかな市民運動的な感じで、こういうのはどうかと行政に相談することによって、そもそも市民側の態度が全然違う状態になる。クレーマー化するのは、要は行政サービスを消費者目線で捉えているからで、税金を払っているのにあれをしてくれなかった、これをしてくれなかったと。そういう態度のみで来られると、行政もたまったものではないし、不満を全部受け止めるのは無理だと思う。

そこでコーディネーターができる役割というのは、消費者目線の市民に対し、宮城さんの言う自治を涵養する態度で臨むことだ。自分の地域がどうやったら面白くなるか。そういう発想に立つ側になって、初めて行政や公立文化施設の担当者と話し合える。その涵養のメディア（触媒）にコーディネーターはなり得る。そう思ったときに、コーディネーターの性質、人としての振る舞いは両義性を帯びていて、「なりすまし」のレベルがポイントになってくる。ある時は行政に対しては市民からの要望を届け、説得しないといけない。市民に対しては消費者目線のクレーマーにならないように、ちゃんと自治の観点からやっていこうと話す。そう言っている真ん中にいるコーディネーターはある意味スパイ的な存在だ。

行政に丸め込まれて、市民を消費者目線のクレーマーにしないことが目的化すると、それは権力側が市民を抑えることになるので、そこは強く自覚して、市民の自治に根差したコーディネーションをしていて、行政の担当者にも分かりやすい言葉で翻訳していく、「なりすまし能力」が要ると思う。



- ◎ 市民の自治に根差したコーディネーションをして、行政にも分かりやすい言葉で翻訳していく
- ◎ 行政の人も自治の意識を持つ

【野村】 もう一つ言うと、行政の人にも自治の意識を持ってほしいということだと思う。今は行政の人が大企業の社員になってしまっている。そこは行政の人たちに対しても頑張ってもらいたいところだ。

—皆さんの話を聞いて、コーディネーターは脱成長のリーダーのような存在になれるといいと思った。右肩上がりの社会で、成長、成長でずっと来ていて、一流の劇場のレベルを上げることもいいが、地域創造はこれといった特徴もない文化施設をサポートするプランを立てて、コーディネーターを置いてもらう。すると、誰も期待していなかった施設が意外と使える、いけるということになるかもしれない。そういうところをやっていただきたい、と思いました。

今日はコーディネーターについて、本質的な話を伺うことができました。長時間ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

以 上